

書評

北村厚著

『20世紀のグローバル・ヒストリー——大人のための現代史入門』

(ミネルヴァ書房、2021年)

大庭 弘継

遠くのもの全体をはっきり見渡せる。しかし、近くものは細かいところまで見えても、全体を見渡すことは難しい。これは、歴史にも当てはまる。著者の前著『教養のグローバル・ヒストリー』がテンポよく、経済を軸にした世界の歴史を描き出したのに対し、本書『20世紀のグローバル・ヒストリー』(以下、本書)は、対象はほぼ20世紀だけのはずだが、前著に比べて分量も多く、しかも全体像は見えにくい。それは現代史の宿命だろう。過去史が少ない文献や考古資料など限られた素材から復元されるのに対し、我々自身の経験も含めて、現代史は無数の生きた素材から再構築され錯綜する。つまり、細かいところまで見えすぎてしまう。

しかし著者は、歴史の細部を正面から引き受けつつ、それでも歴史の全体像を有機的に連関する事象として描き出す。分量は多いが、単なる事実の列挙ではない。本書は、前著に引き続き、世界のあらゆる地域に目配りしながら、歴史の全体像と細部との一体性を提示している。それは、以下のような特徴として現れる。

第一は、時代の駆動力の提示である。前著において、筆者が提示した駆動力は経済であった。本書では、およそ10年刻みで駆動力を、植民地主義、人種主義、社会主義、民族主義、宗教、といったイデオロギーとして提示している。筆者が意図したものではなからうが、意図せざる人の営みである経済活動は下部構造に退き、代わって人々がイデオロギーで世界を駆動した結果としての現代史を描き出す。いわば、現代は、人々が世界の在り方を変えうる時代となったといえる。

第二は、そのイデオロギーが、衝突し合成された帰結として、現代史を描いている点である。たとえば本書は、平和探求の帰結として称賛されることが多いヨーロッパ統合を、相異なる様々なイデオロギーの合成として描き出す。安全保障を求

めるフランスのリアリズム、米国への対抗心などのセンチメンタリズムが作用しており、平和探求の結果と単純化できない、ヨーロッパ統合の背景を描き出している。

第三に、事象の連鎖である。前著は、経済活動の伝搬を駆動力として世界史の事件を描き出していた。しかし本書は、世界規模の事象が一国の地方の日常生活を突き動かす様子も描き出している。たとえば、世界恐慌が生糸の輸出を激減させ、その影響を受けた長野の養蚕農家が大挙して満蒙に移住し、その開墾のために土地を奪われた中国人が反日ゲリラに加担していくといった、人々の生活と世界史の事件を、事象の連鎖として描き出しているのである。

この点を言い換えると、筆者は日常生活から世界史を描き出すことを企図している。歴史において捨象されがちな、日常生活から世界史をつなげる企てである。思えば『世界史』教科書は、高校生活という日常に存在していた。当時、教科書の無味乾燥さに辟易した方も多いただろう。その無味乾燥さを克服する手立てとして、筆者は、日常生活と世界史の大きな流れをつなごうとしたのだとも思える。

その結果、本書は、教科書を種本とするにもかかわらず、教科書より細かい記述であふれている。なお、それは蛇足の記述ではない。本書は教科書の単なる合本ではなく、教科書の在り方の刷新を目指したゆえである、と評者は考える。

だが本書も限界を抱えている。それは、教科書に内在する限界である。日本の教科書は、相対的に、アフリカと南アメリカの記述が少ない。その結果、国際的な事件もしくは国際的に話題になった事件のみで、これらの地域は記述される。

その意味で本書は、いまだ日本における世界史の教科書である。そして本書は、新たな世界史へと向かう重要なマイルストーンである。